

山梨県環境科学研究所 国際セミナー Aug. 27, 2006  
「プラスチック・リサイクルの現状と未来」を終えて

山梨県環境科学研究所 客員研究員  
奥脇 昭嗣



山梨県主催の本国際セミナーに実行委員として参加できるというので、楽しみにしておりました。企画を進めてこられた佐野研究員の山梨県からの転出や、講演会座長をお願いした山梨大学の小宮山教授が米国出張となるハプニングがありました。住民参加に配慮して“容器包装プラスチックのリサイクル”を総合討論で取り上げたのに、山梨県ではあまりリサイクルが進んでおらず、地元の方々に多く参加していただけるかどうか当日まで心配でした。

一般市民のため、近畿大学の西田先生には、特にお願いして日本のプラスチックリサイクルの現状をお話いただきました。ご専門のバイオプラスチックリサイクル技術の貴重な講演時間を割いていただき、大変感謝しております。

Mr. Aafko Schanssema のご講演の中で、拡大 EU のプラスチックリサイクル戦略では、経済性、環境効率性を意識して、汚れたものはサーマルリサイクルを進めるという方針は、肯けるものでした。国内では容器リサイクル法のその他プラスチックにおいて、材料リサイクルが急増しているのに入札価格は高止まりしています。業界は勿論、自治体の費用負担も著しく増えている現状は自治体の“ごみ有料化”を後押しするものでもあり、リサイクル手法の優先制度について考え直すべきです。緊急避難的に、負担の軽減、環境効率性から地域でサーマルリサイクル設備や熱利用・発電設備に余裕のある自治体は再考の余地があるように思われました。

Dr. Renate Lutzkendorf 氏 (TITK 研究所) のご講演では、欧州のポリエステル繊維のリサイクルは材料リサイクルを中心に進んでいることが印象に残りました。

逐次通訳であったため、当日午前中にスライド枚数を半減されるなど外国の講演者の方々にはご負担をおかけしたが、ベテラン通訳の氏のご協力により、何とか講演に間に合わせる事ができ、またスライドの適切な和訳も良く、理解に役立ちました。



講演を受ける形での総合討論では、時間が少ない中、パネリストの専門分野が広いこともあって、現状の紹介にとどまり、パネリスト・参加者ともに満たされないものが残ったのではなかろうかと思えます。



翌日からのプラスチックリサイクル化学研究会の討論会参加の方々、地元自治体の方々、地元でリサイクルに関心をお持ちの方々など多くの方にご参加いただき、なかなか難しい、プラスチックやポリエステル繊維のリサイクルなど欧州の事情に熱心に耳を傾けていただきました。

そのような中、山梨県環境研の小俣一彦副所長を委員長とする委員会の方々、そして、事務方を含めた研究所の多くの方々のご協力のもと、

ハプニングを乗り越え、さしたる混乱もなくセミナーを終えることができ、安堵しております。

このセミナーを機に、地元で持続可能な社会へ橋渡しできるより良いプラスチックリサイクルシステムが研究・開発されていくことが期待されます。

